

2026 YOSAKOIソーラン祭り参加者フォーラムinとかち 開催報告書



【開催結果】

日程：2026年10月3日（土）・4日（日）

〈1日目〉

13:30～13:50 開会式
13:50～15:00 全体会議
15:25～17:00 分科会
17:00～17:20 チェックイン・夕食
20:00～21:40 懇親会

〈2日目〉

9:30～11:00 全体会・総括
11:00～11:30 閉会式

会場：糠平館観光ホテル／糠平温泉文化ホール(上士幌町ぬかびら源泉郷北区48-1)

主催：一般社団法人YOSAKOIソーラン祭り組織委員会

主管：一般社団法人YOSAKOIソーラン祭り組織委員会 十勝支部

参加者：68チーム・260名（スタッフ含む）

【開催テーマ】集い、語り、次のステージへ

「集う」地域・世代・立場を超えて、祭りを支える人が集まる

「語る」経験・課題・YOSAKOIへの想いを率直に共有する

「次へつなぐ」得た気づきや学びを第36回と日々への活動へ「持ち帰る」



開会式 / 全体会議・分科会 / 懇親会 / 閉会式

開会式

- 挨拶
一般社団法人YOSAKOIソーラン祭り組織委員会
専務理事 伊藤 耕作
一般社団法人YOSAKOIソーラン祭り組織委員会 十勝支部
支部長 志賀 貴之
- 開催地挨拶
上士幌町 副町長 佐藤 泰将 様



全体会議・分科会

- 《全体会議》「YOSAKOIソーランのDNAとは何か」
4つのテーマについてパネルディスカッション形式で討論
- ①35年で、何が変わったのか
 - ②良くなったこと、その一方で失ったもの
 - ③YOSAKOIソーランのDNAとは
 - ④DNAを守るために、何を変えるのか



- 《分科会》
- 第1分科会「チーム運営」～“続けられるチーム”を考える
 - 第2分科会「審査」～何を評価し、祭りの未来に何を伝えるのか
 - 第3分科会「作品作り」～“守るもの”と“変えるもの”
 - 第4分科会「SNS」～チームからの発信を考える



懇親会

夕食後の懇親会では、グループ対抗の“お絵かきですよ”ゲームや、十勝19市町村の景品があたるスタンプラリー、支部長有志の皆さんによる余興なども行われ、にぎやかに盛り上がりしました。
チームや地域を超えて、参加者同士が大いに語り合う夜となりました！

(2日目)全体会・閉会式

- 《全体会》
- 各分科会報告(分科会コーディネーターより)
 - フォーラムのまとめ・整理(参加者からの全体意見交換)
 - 総括 ～組織委員会 専務理事 伊藤 耕作

- 《閉会式》
- 次年度開催地挨拶 ～札幌C-ASH支部 支部長 中橋 将太
 - お礼の言葉 ～十勝支部 支部長 志賀 貴之



【 全体会議 】

【テーマ】YOSAKOIソーランのDNAとは何か

【概要】4つのテーマについて、パネリストが討論

【コーディネーター】

・十勝支部 支部長 志賀 貴之

【パネリスト】

- ・YOSAKOIソーラン祭り組織委員会 専務理事 伊藤 耕作
- ・倭奏 総代 下畑 浩二
- ・札幌TWN支部 支部長 新琴似天舞龍神 総代 梶浦 宣明
- ・北・北海道支部 支部長 夢想連えし 代表 工藤 尊子



《テーマ① 35年で、何が変わったのか》

- ・一番変わったのは「地方のチームがなくなったこと」だと思う。昔多かったのは行政の支援があったから。今残っているチームは自助努力ができています。(梶浦)
- ・北・北海道支部においても最盛期に比べて3分の1チームが減っている。変わったことは演舞の内容と表現力。35回を迎えて、クオリティが上がってきている。(工藤)
- ・YOSAKOIソーランが変わったというより、社会が変わったと思う。昔と今ではYOSAKOIソーランを始める入口が違う。昔はネット社会ではなかったの、高知のよさこいを見てなんとなくよさこいっぽい作品を作っていたと思う。だが今はSNS等で参考にするものがいっぱいある。ということは新しいものが生まれにくいのでは。(下畑)
- ・YOSAKOIが1990年代後半に全国に一気に広がっていった。先ほどクオリティの話があったが、全国のチームの演舞を牽引してきたのもYOSAKOIソーラン祭りなのではないか。規模が拡大していく中で、コロナ禍を経て地域貢献を審査に加えながらやってきた。これが35年間の変化。(伊藤)

《テーマ② 良くなったこと。その一方で失ったもの》

- ・規模が大きくなり、参加者は増えたものの、その規模に合った運営者が相対的に増えなかった。(伊藤)
- ・昔、組織委員会と参加チームの意見が合わず、組織委員会と議論するためのチーム協議会ができたが、対立するだけでなく、参加者も一緒になって祭りを作っていこうということで全道の支部が出来上がった。支部ができたことで今の活動につながっている。その一方で、「地域感」がなくなってきた。(梶浦)



◇良くなったこと、失ったもの、変わったこととあるが「変わっていないこと」について

- ・35年たっても「札幌の祭り」に感じる。どうやったら「北海道の祭り」になるか。(工藤)
→札幌で開催しているという意味で「札幌の祭り」である事実は変わらない。参加チームの皆さん自身の意識が変わることで「北海道の祭り」につながるのでは。(伊藤)
- 実際6月の本祭から10月ごろまでがYOSAKOIソーラン祭りなのではないか。
支部大会やチーム主催のイベントを各地域で立ち上げてくれている。それを「北海道の祭り」と言い切ったらいいのでは。(下畑)
- ・その年の大賞チームが頑張っって地方に行った方がいい。遠くまで足を運び、YOSAKOIソーランをPRする役割がある。それを支える仕組みを組織委員会と考えると良いのでは。(工藤)
- 金銭面の問題もあるが、どういった形で支えるか考えていきたい。(伊藤)
- ・「札幌の祭り」でいいのでは。本州の人は「北海道の祭り」と言う。
開催地が札幌だから「札幌の祭り」だが、地方でも頑張っているのだから「北海道の祭り」に繋がっていると思う。(梶浦)



【 全体会議 】

《テーマ③ YOSAKOIソーランのDNAとは？》

- 街を舞台に自由に挑戦することだと思う。挑戦する土台を若い世代に引き継いでいきたい。(下畑)
- 自チームカラーを引き継いでいくことが大切。チーム内の様々な役割をいろんな人で担当しているわけではない。だからこそ次の世代につなげるのが難しい。(梶浦)
- 踊ることや祭り自体への興味が薄れてきた部分もある。しかし今も続けているのは、地域やチームへの愛着があるから。愛着さえあれば続けていける。(工藤)



◇U-40審査の今後について

- 支部長会議ではU-40の今後の在り方を話し合っているが、地方チームや少人数チームの生きがいでもあり、今後の影響は大きい。(志賀)
 - 少人数チームの活性化のために始まったU-40だが、現状では活性化につながっているのだろうか。今改めて仕組みを変える必要があるのではないか。(伊藤)
 - U-40の形が変わるのは仕方がないし必要なこと。だが、組織委員会が最終的にどうしたいのか知りたい。(工藤)
- 祭り全体がどう盛り上がるかが重要。U-40というコンテストだけをもってゴールは設定していない。(伊藤)
- U-40ができたのは、昔のフォーラムで皆の意見が反映されたから。最初は本祭へのステップアップのためだったが、今はU-40大会の中で戦っている。(梶浦)
 - 地方の少人数チームと札幌の少人数チームの意味合いが違う気がする。(工藤)

《テーマ④ DNAを守るために、何を変えるのか》

- 40回、50回とYOSAKOIソーランをつないでいくために、今、何を変える必要があるか？(志賀)
- お祭りをただ大きくするだけではだめ。組織委員会だけではなく、参加するチームも協力して祭りを作り上げなければいけない。(梶浦)
- 高知に比べて新しいお祭りだからこそ、みんなでどうやっていくか考えるべき。例えば「50回ではこうなりたい」と決めてもそうはならない。何かあったらなくなってしまうこのお祭りだからこそ、自分でお祭りを作っているという意識を持つ、「自分事化する」ことが大切。(下畑)
- 地域のチームが残っていくことが大切。人口減少により地域の中でメンバーを増やすことは現実的に難しい。だからこそ、その町に住んでいなくても応援してくれる人を増やすことが大切。(工藤)
- この祭りのDNAは、街を元気にしたい・誰かを喜ばせたいなどの「他者への想い」だと思う。自分の欲求だけではだめ。また、直接人と話し合うことはエネルギーを生む。議論できる場所をたくさん作り続けることを頑張りたい。(伊藤)

《まとめ》

- 「YOSAKOIソーラン祭りは我々が一緒に作っているんだ」という認識で次の世代に引き継いでいかなければいけない。10年後20年後にこのフォーラムの場で次の世代が語れるそんな環境を作っていけたらと思う。(志賀)



【第1科会：チーム運営】“続けられるチーム”を考える

テーマ：人が集まり、育ち、続いていくチームをつくるには？

異なるタイプのチームの事例から、継続的なチーム運営のヒントを探りました。

《パネリスト》 実績編：北昂 代表 田中美希

学生編：小樽商科大学“翔楽舞”代表 物見泰知

地域編：恵庭紅鴉 代表 相馬 ゆき

《進行》 むらむらむらあず 佐々木剛志 / tokachi紅 下村寛恵

パネリストチームの皆さんから、それぞれの質問に対する事例や考え方を紹介していただき、参加者と意見交換を行いました。

◆チームが一番大切にしていることはなにか

- ・メンバーを家族のように考え、「帰ってきたいと思えるチーム」「誰一人置いていかないチーム」を目指している(北昂)
- ・ミッション・ビジョン・バリューを不変の活動目的として、「小樽のために何ができるのか」を考えている(翔楽舞)
- ・市民交流、街の活性化、青少年の健全育成が大切な柱。「恵庭紅鴉らしいか」も判断基準にしている(紅鴉)

◆成功した取り組み

- ・まだ若いチームなので毎年試行錯誤。その年のメンバーの特徴も踏まえて、「当たり前」を変えてみる。(北昂)
- ・子ども食堂の手伝いで出会った子たちがチームを好きになり、YOSAKOIを好きになり、自分たちでチームを作って本祭にもでてくれた。(翔楽舞)
- ・衣装や作品を2年間は変えないことで、金銭面や練習面の負担を減らす工夫もしている。(紅鴉)

◆メンバーが辞めたいといったときチームとしてどう向き合うか

- ・別のチームへ行ったとしても、「行ってらっしゃい、いつでも帰っておいで」という気持ちで向き合っている(北昂)
 - ・やめないようにどうするか。全員に役割を持ってもらうことで自覚や自主性を育てる(翔楽舞)
 - ・チームのモットーを話したうえで継続するかを決めてもらう。(紅鴉)
- ⇒各チームとも、無理に引き留めず、その人がどうしたらYOSAKOIを続けられるかを考えている。人を集めることだけではなく、「集まった人が、ここにいたいと思える環境をどうつくるのか」ということが、チームを続けていくうえで重要

◆チーム内で意見が割れた時、最後は誰がどのように決めるか

- ・最後は代表が決めるが、その分野で頑張っているメンバーの意見を聞き、チームとして大事なところを考える(北昂)
- ・自己満足になっていないか、小樽のためになるかを考えて、最後は代表が決める(翔楽舞)
- ・「どちらが恵庭紅鴉らしいか」を判断基準にしている。チームの柱をしっかりとさせると、もめることも少なくなる。(紅鴉)

◆作品の完成度と、メンバーが楽しむこと、両立が難しいときどう判断するか

- ・お互いに踊りを見せ合う時間をつくり、誰かに向けて踊る楽しさを練習から感じてもらう(北昂)
- ・コミュニティを作った延長線上に練習があると考えている(翔楽舞)
- ・完成度と楽しいは矛盾しない。行きたい・楽しい練習を考える。(紅鴉)

◆もし今、ゼロから新しいチームを作るとしたら最初に何をするか。そして10年続けるために何を大切にするか

- ・一人ではできないことなので一緒に未来を語れる仲間を見つける。チームの核を作る。(北昂)
- ・まずは目的・指針を決めて、賛同してついてきてくれる仲間を探す。(翔楽舞)
- ・もし作るなら紅鴉のライバルチームを作りたい。10年続けるには「思いやり」が大切。(紅鴉)

(参加者からの意見)

最初に何をするか

- ・目標をはっきりさせる
- ・信頼でき、一緒に動ける仲間を集める
- ・メンバーを受け入れられる環境をつくる

10年続けるために大切にすること

- ・メンバーの気持ちの統一
- ・人と人との縁
- ・「なぜYOSAKOIを始めたのか」というたくさんの「好き」を忘れない



チームを長く続けるために、特別な仕組みだけが必要なのではなく、「何のためにこのチームがあるのか」という軸を持つこと。そこに集まった一人ひとりを大切にすること。地域とのつながりを大切にすること。そして、YOSAKOIが好きだという気持ちを忘れないこと。

これらが、「人が集まり、育ち、続いていくチーム」につながっていくのではないのでしょうか。

【第2分科会：審査】何を評価し、祭りの未来に何を伝えるのか

テーマ：何を評価し、祭りの未来に何を伝えるのか

現在の審査の目的と役割を改めて共有し、祭りの理念や未来につながる審査のあり方を考えました。

《パネリスト》 YOSAKOIソーラン祭り組織委員会 専務理事 伊藤耕作
YOSAKOIソーラン祭り学生実行委員会 代表 渡邊志道

《進行》 Excla!matioN 黒田勝史・高松陽与

パネリストから、現在の審査制度や審査方法の大枠を説明の上、「審査方法」「U-40大会」「地域貢献賞」について参加者と意見を交わしました。

《現行制度の整理》パネリストより説明

◆現在の審査制度全体の考え方と、審査が祭りの中で果たす役割

・審査は、参加者の増加や演舞クオリティの向上を、競争原理の中で期待して祭りのひとつの企画として生まれ、祭りのメインコンテンツとして発展し、全国に広がるきっかけとなった。

◆本祭審査、U-40大会、地域貢献賞の位置づけ

・審査は、「他者への想い」が重要であると考えている。その中で「少人数チームの活性化」のために U-40 審査が生まれ、祭りの継続可能性のために「地域貢献活動」も審査に加えることとなった。

◆制度を設計・見直す際に、特に大切にしていること

・祭り全体のありかたとのバランスが重要。例えば、祭りの全体像がどうであるかによって、「少人数チーム」がどうなっていくてほしいか」などを考えていく必要がある。

◆審査員への説明や、公平な運営のために注意していること

・演舞をしっかり見たうえで審査用紙への記入は演舞と演舞の合間に行うよう説明している。運営側の姿勢としても、観客やチームから見て安心できる審査体制のため、審査員の記入チェックや振る舞いにも気を付けて動いている。

《質疑応答》参加者との意見交換 ※一部抜粋

Q 審査のルールについて、鳴子を持つ、ソーラン節を入れる時間ばかりに焦点を当てている審査員がいるが、そのことに関する審査説明はあるのか。

→A 2大ルールとして説明を行っているが、審査員の感性を含めた上での審査なので、審査員に委ねられている。

Q 市民審査員というのはどこまで市民なのか。

→A その年の本祭に出場していなければ市民である。過去所属チームの審査枠を担当しないように配慮している。

Q 地域貢献点について、どのような観点から採点しているのか。

→A 評価基準は公表している通り。まだ模索段階であり、演舞の評価が地域貢献点の加点によって著しく変化することは望ましくない。評価委員会に基づいて、YOSAKOI ソーランとして何を求めていくのかを決めている。

Q 地域貢献点の採点に必要な項目がないので採点できないという事態を防ぐためのテンプレートはないのか。

→A いまは審査のために提出してもらっているが、チーム側でも外部の人にチーム自体を紹介する際の「活動記録」として活用してほしい。活動自体に意味を見出してもらうようなカウンセリングといったことも検討している。

Q U-40大会は、道内チームのステップアップに特化した基準を設けるべきでは。

→A 道内チームの要望でできた制度だが、道内チームのためだけのものではないので、対象を絞る想定はしていない。

Q 下限を設けるということは、本祭の審査を受けるしかないという厳しい条件となるチームがあるのではないのか。

それにより、小規模チームのモチベーションがなくなってしまうのではないのか。

→A お祭りを楽しんでほしい、というのが第一。一方でU 審査がステップアップとして活用されていない現状がある。モチベーション云々という話をしてしまうと收拾がつかない。経済的な補助など、現実的な着地点を設けたい。

審査方法、地域貢献、U-40と、それぞれ違うテーマについて話し合いましたが、共通して見えてきたのは、制度そのものだけでなく、「その制度は何のためにあるのか」を改めて考えることが大切である、ということです。

単に「順位を決めるための審査」として考えるだけではなく、「YOSAKOIソーランとして何を大切にし、祭りやチームの未来へ何をつないでいくのか」という視点から、これからの審査のあり方を、参加チームと主催者側が一緒に考え続けていくことが重要です。

【第3分科会：作品作り】何を守り、何を変えていくのか

テーマ：YOSAKOIソーラン作品に、何を守り、何を変えていくのか？

複数のパネリストチームが作品作りの考え方を提示し、テーマごとに意見交換を行いました。

《パネリスト》 平岸天神 リーダー 榎木隆太 / 藤・北大&Honda Cars北海道 代表 森歩未
遯～すさび～ 代表 佐藤良太 / 室蘭百花繚蘭 代表 加藤竜樹
《進行》 ExclamationN 小野家百合子 / tokachi紅 仲野心音

パネリストチームの皆さんから、それぞれの質問に対する事例や考え方を紹介していただき、参加者と意見交換を行いました。

◆作品作りで一番大切にしていることはなにか

- ・正調ソーラン節と鳴子を外せない要素として取り入れながら、お客さんに何を届けたいのかを大切にしている。(天神)
- ・“藤北らしさ”を大切にしている。自分たちが楽しまなければ観客を楽しませることもできない。(藤北)
- ・鳴子は恋人。振りを想定して音にもこだわっている。アイヌ思想を取り入れることも続けていきたい。(すさび)
- ・スピード感・表現力・技のキレ。他チームが真似できない動きにこだわる。(百花)

★共通するのは「自分たちのチームらしさを大切にすること」そして「何を観客に届けたいのかを考えること」

◆テーマ1：鳴子

- ・常に当たり前と一緒にあるもの。観客に音が届くように鳴らすことが大事。(天神)
- ・YOSAKOIソーラン祭りの象徴。作品の一部としてテーマに合わせた鳴子を毎回手作りしている。(藤北)
- ・鳴子は恋人。手になじむようになるまでひたすら鳴らす「鳴子の体操」もしている。(すさび)
- ・相棒なので、落とさないように衣装から工夫している。ソーラン節のパートで鳴子を鳴らすようにしている。(百花)

⇒鳴子は、単に手に持っているだけではなく、音を観客に届けることが大切

◆テーマ2：ソーラン節

- ・アレンジはせず正調ソーラン節を使っている。その年のテーマに合わせた歌詞で変化を出している。(天神)
- ・テーマに合わせてアレンジしている。自チームの色を大切にしている。(藤北)
- ・観客が聞いてソーラン節とわかるメロディーラインを大切にしている。(すさび)
- ・アレンジはあまりせず、合間にオリジナルフレーズを入れて独自性を出している。(百花)

⇒鳴子とソーラン節については、2大ルールとしての意味や想いを次の世代へ伝えていくことの大切さも話されました

◆テーマ3：旗・幕など演出道具

○踊りそのものと演出道具のバランスや、優先順位について各パネリストからお話いただきました。

道具そのものを見せるのではなく、踊りや作品の世界観をより伝えるためにどう使うかという意見が多く出されました。「演出道具は踊りを引き立たせるもの」「大道具は調味料、味付け」という言葉もあり、作品の中心に何を置くのか、観客に何を届けたいのかを考えたいうえで使うことが大切と言えます。

◆テーマ4：著作権(音楽・振付)

○振付の“参考”と“模倣”の境界について、「リスペクトを持ったうえで参考にするのはよいのではないか」「映画やアーティストなど様々なものをみてアイディアを得ている」「多くのチーム・演舞があり、似通ったものはでてるが、他を参考にしながらチームの作風をど表現するかが大切」といった意見が出されました。

◆まとめ

- ・チームにとってのアイデンティティや培ってきたものを次の世代に残していくことが大切。(天神)
- ・藤北らしい世界観を守って後輩へつないでいきたい。変えていきたいものはYOSAKOIへの固定観念。テーマ系のチームのように様々なスタイルのチームがあってもよい。(藤北)
- ・2大ルールを守りながら、アイヌ思想と共に作品作りを続け、世界観を伝えていきたい。(すさび)
- ・チームの人数が20～30人でも決して少なくない。まずは1人増やすところから諦めずに頑張してほしい。フォーラムではライバルを作って帰ってほしい。負けたくない、ではなく、一緒に頑張れるライバルが大切。(百花)

鳴子やソーラン節というYOSAKOIソーランの大切な部分、そして、それぞれのチームが積み重ねてきたアイデンティティや「チームらしさ」は、これからも守り、次の世代へつないでいく。一方で、作品のテーマや表現方法、アレンジなどは、時代に合わせて新たな挑戦も必要だということが見えてきました。



【第4分科会：SNS】“届く発信”と“守る発信”をチーム運営の力にする

テーマ：“届く発信”と“守る発信”をチーム運営の力にする

SNSの可能性とリスクを整理し、チームの広報・発信・メンバー募集に活かす考え方を共有しました。

《パネリスト》 天嵩～Amata～ プロデューサー 小笠原昂輝 / SAPPOROこいこい 代表 山下潤
ど感動 代表 稲田幸輝 / 北海道大学“縁” 代表 戸次 光
《進 行》 十勝港ソー乱舞 村野貴典 / 尊-Mikoto- 福島由美子

YOSAKOIソーランチームの中でも、SNSで特に多くのフォロワーを持つパネリストチームの皆さんから、それぞれの質問に対する事例や考え方を紹介していただき、参加者と意見交換を行いました。

◆事例紹介

- ・応援してくれるファンや、メンバーの知り合い、チームを知らない人や北海道に来たことのない人がターゲット(天嵩)
 - ・「よさこいに関わる人を増やす」が目的。ブランディング班を作って、投稿前の誤字脱字チェックもしている(こいこい)
 - ・祭りに興味を持ってもらう目的で、チーム活動だけでなく祭りの魅力も発信している。(ど感動)
 - ・活動紹介のほかに、祭りに参加していく中で感じた魅力を発信して、祭りに還元できることを考えている。(縁)
- ★自チームの宣伝だけではなく、ほかのチームや祭りそのものにも興味を持ってもらいたいという考え方が印象的でした

◆テーマ1：バズらせ方・差別化

- ・本祭前のカウントダウンや、フォトコンテスト(#で写真投稿してもらう)、天嵩傘チャレンジなどの反応がよかった(天嵩)
 - ・熱量の高い時期に熱量の高いものを投稿できるように計画性が大事(本祭直後に「よさこい始めませんか」という投稿など)。投稿の色味とテイストを統一。メンバー募集記事にはQ&Aを入れて情報開示するなど工夫している(こいこい)
 - ・メンバー一人一人に焦点を当てた投稿が人気。投稿画像はAIに頼らず自分たちのスタイルを重視している(ど感動)
 - ・映像を使った投稿を多めにしている。新歓時期には大学周辺グルメ紹介がよく見られ、チームを周知できた。(縁)
- ★写真や映像に独自性を出すための工夫や、投稿するタイミングの重要性が伺えるお話が多く聞かれました

◆テーマ2：広報活動・メンバー募集

- ・祭り公式HPの踊り子募集掲示板を頻繁に更新して目に触れる機会を増やしている。(天嵩・こいこい)
 - ・「本祭」「後期メンバー」などのYOSAKOI用語は使わないよう気を付けている。(こいこい)
 - ・オープンチャットを作って、体験会に行きたいと思った人がすぐ参加できる環境づくりをしている。(ど感動)
 - ・新入生が興味を持ちやすいYOSAKOI以外の内容⇒活動紹介という順で投稿。普段の雰囲気も発信。(縁)
- ★単に「メンバー募集中」と発信するだけではなく、YOSAKOIを知らない人にも分かる言葉を使う、普段のチームの雰囲気を伝える、体験会へ参加しやすい環境をつくるなど、見る人の立場に立った発信が重要。

◆テーマ3：SNSで注意すべきこと・トラブル

- ・枠やフォントを統一したり、テンプレを使うことで、誰が投稿しても差が無いように工夫している。(天嵩・こいこい)
- ・SNSのメンバー募集を見て、申込なしで体験会に来る人がおり、チームの雰囲気に合わないことが多かった。そのためSNSでは場所の詳細は書かず、連絡をくれた人だけに伝えるようにしたことでミスマッチが減った。応募の多さよりもメンバーの気持ちを優先。(こいこい)
- ・祭りの公式スポンサーではない企業の広告に絡めた投稿をしてしまったことがある。自分たちの判断だけでは失敗してしまうこともあるので、心配なものは組織委員会に確認することも必要。(ど感動)
- ・過去に、メンバー個人のSNS(BerealやSetlog)で発表していない衣装の画像が流れてしまったことがあり、練習中はそれらのアプリは使用禁止にしている。(縁)

◆まとめ

- ・自分たちがYOSAKOIソーラン祭りに観客を呼ぶ、という姿勢でありたい(天嵩)
- ・SNSを通じてエストニアの方から連絡があったことも。広報担当だけでなくチームで頑張れる仕組みが必要(こいこい)
- ・チームの自己満足にならないこと。(ど感動)
- ・多くの人からの応援を直に受け取ることができるのがSNSのよさ。(縁)

SNSを単に「バズらせる」「いいねを増やす」ためのものにするのではなく、誰に、何を、何のために届けるのかを考えること。

そして、自分たちらしい発信をしながら、同時にチームやメンバーを守る意識を持つこと。

「届く発信」と「守る発信」の両方を大切に、それをチーム運営の力、そしてYOSAKOIソーランの発展へつなげていきましょう。



【 全体会・総括 】

【内容】

1. 各分科会報告（分科会コーディネーターより）
2. フォーラムのまとめ・整理（参加者からの全体意見交換）
3. 総括 ～YOSAKOIソーラン祭り組織委員会 専務理事 伊藤 耕作

《1. 分科会報告》

分科会コーディネーターより、各分科会の内容について報告しました。 ※前頁参照

《2. フォーラムのまとめ・整理》

前日の全体会議・分科会での議論の要点や印象的な意見について、参加者全員で振り返りました。

《3. 総括～祭りが50回・100回と継続するためには～》 組織委員会 専務理事 伊藤耕作

◇ 今、お祭りを楽しめていますか。

いきなり始まった1992年 第1回
急に盛り上がっていった10年間 ～たくさんのテレビ放送・地域の補助金・全国への広がり～
2000年から2011年まで ～爆弾事件から東日本大震災まで。ITの普及～
⇒チーム数は2001年の最多408チームから徐々に減少
コロナを挟み、この15年 ～グローバル化・少子高齢化の始まり・社会環境の変化～
⇒チーム数は横ばい。実はYOSAKOI人口は増加（学校の運動会など）

- *コロナ明け、イベント需要の復活
- *祭り全体での地域貢献活動促進
- *コミュニケーション／人の距離感の変化
- *情報伝達方法の変化（電話・FAX・ポケベル・携帯・SNSなど）
- ・第1回目から第35回を終えたYOSAKOIソーラン祭りや、祭りを取り巻く環境の変化

⇒いま、「地域貢献」の重要性が高まっているが、「踊る・参加する楽しさ」と「地域貢献」は相反するものではないと考えている。チームの「外」とのコミュニケーションの楽しさが伝われば両立できるもの。

⇒祭りが続いていくうえで、最も大切なこと・必要なことは、「参加者が楽しむこと」。

◇ お祭りの持続可能性

1. 最大の課題は「担い手」の持続可能性

- ⇒祭りの規模の拡大に対して、ボランティア・運営スタッフが育っていない。
- ⇒市民ボランティア「かもめんず」の拡充・・・ぜひ踊りを引退したチームの皆さんも、“作る側”へ。
- ⇒学生実委の卒業生を担い手として育てる。学生の間は大通、卒業したら大通以外の会場へステップアップ。
- ⇒世代の分断をさせない仕組み作り

2. 運営コスト・財源の持続性

3. 「参加する側」の負担増 ⇒参加のための事務作業増、チームの体制強化の必要性

4. 「大規模化」と「市民の暮らし」のバランス

5. 警備・安全対策の高度化

6. 気候変動・異常気象への対応 ⇒ゲリラ豪雨や熱中症対策などの課題は開催形式にも影響しかねない

7. 祭りの「公共性」をどう維持するか ⇒祭りは「みんなのもの」・・・外からの意見にも耳を傾ける必要がある

8. 少子化・人口構造の変化

9. 「祭りを見る人」の変化

「祭りを楽しむ」と「祭りの持続性の確立」は天秤にかけけるものではなく、同じ方向の未来。

『自分だけ』『自分のチームだけ』ではなく、『自分を含めより多くの人たち』が楽しめる祭りへ、これからもポジティブマインドを持ってたくさん議論を交わしましょう、できれば直接会って、対面で。

対面でのコミュニケーションを大切に、定期的に“感情の交換”をしながら、50回・100回の祭りを、皆さんで「楽しく」作っていきましょう。

